

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

砂の感触／二本松市立油井幼稚園

震災の影響で、外遊びの時間が長い期間限られていた子どもたち…。砂場で思いっきり遊ぶこともできませんでした。そこで、子どもたちに砂の感触を思う存分味わって欲しいと考えた保育者は、環境の工夫として新しい砂を砂場に山のように大量に入れました。

子どもたちの今の姿を捉え、寄り添い、「科学する心」を育むために必要な援助や環境を考える保育者の思いが伝わってきます。



○ 「川を作ろう」5歳児

新しい砂がトラック2台分砂場に入る。翌朝、大きな山状になっている砂場に子どもたちが、裸足になって入る。「つめたくて気持ちいい」と、どの子も言いながら、砂の感触が心地よさそうである。

固めて団子を作ったり、山のように盛り固めてトンネルを掘ったりする。

Aちゃんが、傾斜のあるところに川筋を作り水を運んできて流すと、水は穴まで流れ落ちずに消えてしまう。

Aちゃんは、その様子を見て「砂が水なんだ!」と表現して水くみにあわてていく。流すが、また少し先まで流れながら、水は砂に吸い込まれて無くなってしまう。

Aちゃんは、何度も繰り返しながら、「今度はどうかな?」と再び挑戦する。そして、水の流れる様子を眺めていた。

そのうち自分の足を入れると「つめたーい」と足を引っ込める。一緒にいたBちゃんも同じように足を入れて「ほんと、つめて!」と同感する。

今度は、水を流すのではなく水を溜めて冷たさ比べになる。

Aちゃんは、水の無くなった穴の中に足を入れて『砂かけてよ』と言う。

Bちゃんが、Aちゃんの足に砂をかけると、

Aちゃんは、「つめたくないよ、なんか、だんだんあったかくなる」と言って、足を砂で覆うことを面白いがる。「こっちの足にもかけて」と言う。



✦ 振り返って

物的環境面から

砂場遊びは幼児たちにとって2年ぶりの遊びになる。裸足で遊ぶことで冷たさを全身で感じ取れたようで、心の開放には欠かせないものと思われる。また、湿らせておくことで、砂の感触がより一層心地よいものとして感じられたようだ。砂場道具は一切使わずに素手や素足で活動したことで感性が豊かに表現されたと考える。

人的環境面から

保育者自身も子どもたちと同様に素足で砂場で活動することは、楽しさと共に感情を共有する為に大事な配慮と考える。また、子ども同士の会話の中にいろいろな気づきや発想が考えられるので、温かく見守りながら援助する姿勢が大切と思われる。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」